

## 特集 5

## 朝鮮人「満洲」移民のライフヒストリーに関する一考察

—ある移民一世の人生の軌跡—

朴 仁哲

## 【要 旨】

本研究は今中国に生活している朝鮮人「満洲」移民一世（以下移民一世）について考える。かつての「満洲」地域である中国の東北三省には、帝国日本時代、朝鮮半島から中国に移住した移民一世たちがまだ住んでいる。依田熹家によれば、「満洲に対する朝鮮人移民は、朝鮮封建社会の解体過程において発生し、後に日本帝国主義の朝鮮植民地化によって激増した」[依田,1976:602] ものである。移民一世たちは、過去の歴史上の出来事として終わったわけではなく、過去の移民体験を引きずりながら、今日もお生き続けている。本稿の目的は、ある移民一世のライフヒストリー（生活史）の語りにも耳を傾け、当事者がそうすることでしか生きられなかった世界を読み取り、そして朝鮮人「満洲」移民の客観的な歴史を前提としながら、その歴史の中での主観的な「生きられた歴史」[蘭,1990:145] を分析することである。

【キーワード】「満洲」、朝鮮人移民、ライフヒストリー

## I はじめに

朝鮮人の「満洲」への移住と定住の歴史には日本の朝鮮・「満洲」支配が深く関わっている。しかし、かつて帝国日本の植民地時代に中国東北地域に朝鮮人が移住したという「歴史的事実」については、極くわずかの研究者を除けば、日中韓を問わず戦後世代はほとんど知らないといつてよい。

日本帝国史と日本植民地史を専門とする歴史学者の山本有造は、「公式の日本帝国は、『内地』を中核とし、その外周を『純領土たる外地』と『準領土たる外地』が取りまく三重の円構造として描くことができる」[山本,2004:68]と述べている。これに従えば、朝鮮人移民は「純領土たる外地」である朝鮮半島から「準領土たる外地」である「満洲」に移住したといえる。田中隆一によれば、「19世紀後半から20世紀半ばまでの約100年間に在満朝鮮人の所属した（することを強制された）国家（政権）とその国籍は朝鮮政府、大韓

帝国、清朝、中華民国、日本、「満洲国」、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、中華人民共和国、さらにロシアまで加えれば、実に10以上になり、この期間の満洲をめぐる国際関係の激しさをそのまま体现している」[田中,2006:59]。田中(2006)の研究に基づけば、朝鮮人「満洲」移民については、いろいろな角度から研究することができるだろう。

## II 朝鮮人の「満洲」への移住過程及び移住の理由

朝鮮人が「満洲」へ移住しはじめたのは、明の時代の末期から清の時代の初めにかけてである。朝鮮人が大量に「満洲」へ移住したのは、19世紀後半になってからであると一般にいわれている<sup>1)</sup>。朝鮮人は、3つの段階を経て「満洲」へ移住した。第1段階(1860～1910年)の前まで、中国の清朝は、「満洲」に対して封禁政策をとり、豆満江(中国の図們江)と鴨緑江の北岸に住むことを禁じていた。しかし、1860年から70年に、北部朝鮮で長期にわたる自然災害が発生し、多くの避難民が、清朝の封禁政策を侵して鴨緑江や豆満江を渡り、またはシベリアを経由して「満洲」へ移住した。

第2段階(1910～31年)には、帝国日本が朝鮮半島を併合した1910年前後から「満洲」へ移住する朝鮮人が急増した。とくに「三・一運動」<sup>2)</sup>を機に、日本帝国の植民地統治に反抗して、多くの朝鮮人が「満洲」へ逃れた。その他、この時期の朝鮮人の「満洲」移住の原因として、朝鮮における「土地調査事業」<sup>3)</sup>と「産米増殖計画」<sup>4)</sup>に始まる一連の植民地政策があった。これらの植民地政策により、朝鮮人農民は、土地を失い、深刻な貧困に陥った。また、帝国日本が朝鮮を植民地化した後、日本人が朝鮮に入ったため<sup>5)</sup>、それに押されて、朝鮮人が「満洲」へ移住した。

第3段階(1931～45年)は、帝国日本の国策による移民の時期である。この時期は「満洲国」成立を契機として、朝鮮総督府内部において「満洲」への朝鮮人国策農業移民が政策として具体化し始めた時期である。朝鮮総督府は満洲1931年に「鮮人移民会社設立計画案」、1932年に「満鮮農事会社設立計画」、1933年に「朝鮮人移民政策大綱」を作成した。この時期は朝鮮総督府と関東軍との交渉の過程でそれぞれの利害が表面化した時期でもあり、朝鮮人移民をめぐる朝鮮総督府と関東軍の間には見解上の対立があった。関東軍に影響力を持っていた「加藤完治グループ」<sup>6)</sup>は、日本人移民を優先的に受け入れるべきだと主張していた。朝鮮人の「満洲」への移住に関しては自由放任政策がとられていた。このような無秩序な状況は関東軍にとっても、朝鮮総督府にとっても望ましくはなかった。1941年に「満鮮拓殖株式会社」は「満洲拓殖公社」に統合され、日本人移民と朝鮮人移民の行政事務は一元

化された。日本人移民「第二期五ヵ年計画」にともない、朝鮮人移民に対しても同様な移民計画が策定された。

上記の移住過程を踏まえて、下記では朝鮮人が「満洲」へ移住した理由について簡単に紹介する。ここに朝鮮人が「満洲」へ移住した理由の関連データが一つある。

表1 朝鮮人が「満洲」へ移住した理由

原因及び理由	絶対数	相対数%
本国で経済的困難	30	14.9
金銭難	33	16.4
生活難	72	35.8
衣食難	2	1.0
事業失敗	24	12.0
旅行の結果	2	1.0
政治的理由	7	3.4
満洲農業の有利性	18	9.0
出稼ぎ	11	5.5
事業成功	1	0.5
親戚の勧誘	1	0.5
合計	201	100

出所：李勲求著、拓務大臣官房文書課訳編『満洲と朝鮮人』（1933年、105頁）より転載。

表1から分かるように、「生活難」の比率が最も高く、これに「本国で経済的困難」と「金銭難」を加えると、約3分の2を占めている。満鉄調査部は朝鮮人が「満洲」へ移住した理由に関して、「鮮人の生活上経済的激変による農民層の生活困難のこと」[満鉄調査部,1939:63]であると認めている。朝鮮人が「満洲」へ移住した主な理由は生活の困窮であったといえよう。

### Ⅲ 関連概念の整理

#### 1 ライフヒストリー（生活史）とは

歴史社会学者の中野卓はライフヒストリーについて以下のように定義している<sup>7)</sup>。

ライフヒストリー（生活史、個人史）は、本人が主体的にとらえた自己の人生の歴史を、調査者の協力のもとに、本人が口述あるいは記述し

た作品である。民族誌的な研究の場合と同様に、自他の伝記作成の場合も含めて、人生の現実を再構成することによって解明しようとするライフヒストリーなるものは、私小説や歴史文学のような創作、つまり現実の人生や歴史に虚構を加え芸術的に再構成されたフィクションからは厳密に区別される。(中略) 個人史の場合、本人が自己の現実の人生を想起し述べているライフストーリーに、本人の内面からみた現実の主體的把握を重視しつつ、研究者が近現代の社会史と照合し、位置づけ、注記を添え、ライフヒストリーに仕上げる。

中野はライフヒストリーがフィクションではないことを強調している。それについて筆者も共感できる。語り手は自身の生活体験に基づいて過去を語るわけであって、フィクションを語るわけではない。社会学者の桜井厚はライフヒストリーについて以下のように定義している<sup>8)</sup>。

ライフヒストリーはライフストーリーをふくむ上位概念であって、個人の人生や出来事を伝記的に編集して記録したものである。一般的にライフヒストリー研究では、ライフヒストリーやライフストーリー、オーラルヒストリーのほかに、個人的記録 (パーソナル・ドキュメント)、人間記録 (ヒューマン・ドキュメント)、生活記録 (ライフ・ドキュメント) などの用語がよく登場する。後者の3つはいずれもほとんど同じ意味で使われ、日記や手紙などの文字資料を中心にライフヒストリー資料を包括的に意味する用語である。ライフヒストリーは、ライフストーリーだけではなく他者の話やこうしたライフヒストリー資料、専門的知見のはいった文献資料を加えて構成された記録 (アカウント) である。(中略) ライフヒストリー全体がライフストーリーから構成される場合もある。ライフヒストリーは、対象となる個人の主観的現実を社会的、文化的、歴史的脈絡のなかに位置づけることを主眼としている。

桜井 (2002) は中野 (1995) と同じく、ライフヒストリーとライフストーリーの違いについて言及している。ライフヒストリーはライフストーリーを含む上位概念であり、ライフヒストリー全体がライフストーリーから構成される場合もある。ライフヒストリーは対象となる個人の主観的現実に注目している。

## 2 ライフヒストリー法に関する共通理解

現在、ライフヒストリー法については大体の共通理解ができています。社会学者の谷富夫によれば、ライフヒストリー法の共通理解は10項目にまとめることができるという<sup>9)</sup>。

- (1) ライフヒストリー法は、個人の生活構造（生活世界と言ってもいい）に焦点をあてる。そして、人生の一時期、あるいは一生、さらに世代を超えた生きざまをも対象とし、そこで展開される生活構造の変遷や、世代間の文化の継承・断絶などを長いタイム・スパンで研究する。
- (2) ライフヒストリー法は、異文化を対象とし、それを行為者の動機に遡って内面から理解しようとするときに有効である。
- (3) ライフヒストリー法は、個人と組織・制度・システムを一挙に視野に入れて個人史と社会史、主観的世界と客観的世界、これらの連動関係を把握しようとする。
- (4) ライフヒストリー法は、事象の個別性、固有性を重視すると同時に、個別を通じて普遍に至る道を志向する。個別記述の蓄積を通して類型構成へ至ることができる。
- (5) 経験科学は事実に依拠して仮説の索出と検証を行うが、その「事実」には実証主義的な事実と解釈学的な事実がある。経験科学の一方法としてのライフヒストリー法は、これら両方の事実をとらえることができる。また、ライフヒストリー法はとくに仮説索出のプロセスにおいて強みを発揮する。
- (6) ライフヒストリーなどの質的データと質問紙調査などの量的データとの相互補完関係によって、より豊かな研究成果を生み出すことができる。
- (7) ライフヒストリー調査の成否は、調査対象者とのラポール（信頼関係）にかかる部分が大きい。
- (8) ライフヒストリー調査では、調査者と調査対象者との長時間にわたる双方向のコミュニケーションが行われるので、調査対象者が自らの語りで自らを癒したり（カタルシス）、自らの生の意味づけを再確認する（自己反省）ことができる。同時に調査者自身の自省の機会ともなりえる。
- (9) ライフヒストリー調査では、マイノリティ・グループの声を掬い上げられる。
- (10) ライフヒストリー調査によって得られた結果の公表にあたっては、プライバシーが侵害されることのないよう、調査対象者を匿名・仮名で表すなど、倫理的観点からの慎重さが要求される。

本研究のねらいは朝鮮人「満洲」移民というマイノリティ・グループの声を掬い上げることであり、等身大の移民一世像を描くことである。そのため、移民一世が生きてきたライフヒストリーに注目する必要があると考える。桜井厚はブルナーが提起した「三つの生（ライフ）」の概念を言及している<sup>10)</sup>。この「三つの生（ライフ）」の概念を借用すれば、移民一世たちには、「生活としての生」と「経験としての生」があっても、長い間「語りとしての生」はなかった<sup>11)</sup>。

### 3 記憶の場

本稿では、移民一世の記憶についても考察する。記憶に関する基本的枠組みは、フランスの歴史学者であるピエール・ノラが1984年に創出した「記憶の場」という概念に主に依拠している。

ノラは、「記憶の場は、『場』という語のもつ三つの意味——物質的な場、象徴的な場、そして機能としての場——においての場であるといえる。また程度は異なれ、そのいずれの属性をも同時にもっている」[ノラ, 2002: 48]と述べている。三つの場が相互関連している例として「世代」を挙げている。ノラによれば、世代は、人口上のことを指し示すがゆえに物質的である。また、記憶の結晶化も伝達もおこなうがゆえに機能的であると考えられる。そして、ごく少数のものたちが経験した出来事や体験によって、それを経験しなかった多数の者たちを性格づけるがゆえに、本質的に象徴的である[ノラ, 2002: 48]。本稿で取り上げている壮絶な移動を経験した移民一世は、まさにノラが提起しているように、物質的な場、象徴的な場、そして機能としての場を備えている人であるといえよう。本稿で主眼としているのは、現在において移民一世がいかに関与された現実を解釈し、記憶していることにあるため、ノラの「記憶の場」の概念は大いに参考になる。

## IV 先行研究及び準拠する分析枠組みの検討

本研究が準拠する分析枠組みは、ライフヒストリー（生活史）研究及び移民研究、そして植民地研究である。

### 1 ライフヒストリー（生活史）研究

ライフヒストリー研究は本研究の研究課題と直接関連する。朝鮮人「満洲」移民のライフヒストリーないしオーラル・ヒストリーに関する先行研究はあるが、本研究が課題とする移民体験者たちの植民地経験生活世界に着目した研究は少ない。現段階では、金賛汀の「『満洲』・そこに打ち捨てられし者—20 数万人の朝鮮人開拓移民」(『世界』第 498 号、第 499 号、第 501 号、岩

波書店、1987年)<sup>12)</sup>、中国朝鮮族青年学会編の『聞き書き中国朝鮮族生活誌』(社会評論社、1998年)などがある。そのほかに、韓景旭の『韓国・朝鮮系中国人＝朝鮮族』(中国書店、2001年)がある。管見するかぎり、金賛汀は朝鮮人「満洲」移民の体験者に対してインタビュー調査を行った最初の者である。戦後、日本(人)に向けて朝鮮人「満洲」移民の存在を紹介したことの意義は大きい。ただし、金は数人の「集団移民」の事例のみを紹介したことにとどまり、朝鮮人「満洲」移民の全体の様子を紹介したとは言い難い。中国朝鮮族青年学会編は64人の移民体験者の証言を紹介した労作であるが、この本は証言の紹介だけにとどまっており、分析はしていない。その意味でこの本は研究書ではなく資料集である。また、この本は移民一世の1945年までのライフヒストリーのみを紹介しており、朝鮮人「満洲」移民の全体像を描いていない。韓は戦前生まれの数人の朝鮮族古老の証言及び2人の朝鮮族古老のライフヒストリーを紹介しており、興味深い分析はしていない。この本は現代の朝鮮族の民族意識や宗教、年中行事などについての紹介であり、朝鮮人「満洲」移民に関する研究書ではない。

## 2 移民研究

移民研究は学際的な研究領域である<sup>13)</sup>。本研究の研究テーマに移民が入っているように、本研究は移民研究の一環に位置付けることができる。朝鮮人「満洲」移民研究においては、移民史や移民政策、そして移民の教育の研究が蓄積されてきた。朝鮮人「満洲」移民の移民史に関する研究は、玄圭煥の『韓国流移民史(上)』(語文閣、1967年)及び孫春日の『中国朝鮮族移民史』(中華書局、2009年)がある。そのほかに、洪鐘侶の『『満洲』(中国東北地方)における朝鮮人農業移民の史的 연구—1910～1930年を中心として—』(京都市大学農学研究所博士論文、1987年)、高崎宗司の『中国朝鮮族—歴史・生活・文化・民族教育』(明石書店、1996年)、鶴嶋雪嶺の『中国朝鮮族の研究』(関西大学出版部、1997年)などがある。

玄圭煥の『韓国流移民史(上・下)』は朝鮮人移民研究の嚆矢となっており、高く評価されている。玄は朝鮮人の「満洲」への移住のみならず、朝鮮人の他の地域への移住についても紹介した。本研究と関連する『韓国流移民史(上)』の「満蒙編」においては、朝鮮人「満洲」移民の移住方式、定着過程、教育などについて整理した。玄の著作は朝鮮人の移民研究の第1級資料であることには異議はないが、資料の紹介にとどまっており、分析はなされていない。孫は時期別における朝鮮人の「満洲」への移住の特徴、移民政策、国籍問題などについて詳しく論じた。洪は1930年以前の朝鮮人「満洲」農業移民の

歴史に着目し、朝鮮人が「満洲」へ移住した後の定着時の問題点を指摘した。高崎は朝鮮族の移民の歴史に簡単に触れた後、主に朝鮮族の文化、教育などについて検討した。鶴嶋は朝鮮人の「満洲」への移住の起源説、「満洲」における朝鮮人の土地状況や水田開発状況などについて論じた。

次に朝鮮人の「満洲」移民の移民政策に関連する研究は、松村高夫の「満洲国成立以降における移民・労働政策の形成と展開」満洲史研究会編『日本帝国主義下の満洲』（御茶の水書房、1972年）、松本武祝の「朝鮮人の満洲『国策』農業移民—政策と実態—」（京都大学総合人間学部編『「満蒙開拓団」の総合的研究—母村と現地』1995～1997年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書、1998年）、孫春日の『「満洲国」時期朝鮮人開拓移民研究』（延辺大学出版社、2003年）、金永哲の『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』（昭和堂、2012年）などがある。松村は「満洲国」成立以降から1945年の敗戦までの時期に、「満洲」への日本人、朝鮮人、そして中国人の移民政策がいかに展開されたのかを明らかにした。松本は日本政府の国策による朝鮮人「満洲」農業移民の政策の展開を3期（第1期：交渉期、第2期：妥協期、第3期：本格開始-解体期）に分けて論じた。孫は「満洲国」時期の朝鮮人移民に関する政策の変遷及び実施状況を包括的に論じた。金は朝鮮人「満洲」移民の実態を4つの時期（「満洲事変」期、移民統制政策成立期、変遷期、衰退期）に分けて日本政府の各植民地機関の「満洲国」期の移民導入や統制政策を通して考察した。

そして、朝鮮人「満洲」移民の教育に関する研究は、まず、竹中憲一の『満洲』における教育の基礎的研究—朝鮮人教育』（柏書房、2000年）を挙げることができる。竹中は「満洲」における朝鮮人教育について、外務省外交文書などによって明らかにした。

### 3 植民地研究

本研究は直接の植民地研究ではない。ただし、本研究の研究対象者である移民体験者たちが生きてきた人生に植民地朝鮮と「満洲国」が絡んでくるので、そのかぎりでは本研究は植民地研究と接点があると考えられる。植民地研究に関しては国籍問題に関する研究が多く蓄積されてきた。国籍問題に関する研究は、水野直樹の「国籍をめぐる東アジア関係—植民地期朝鮮人国籍問題の位相—」（古屋哲夫、山室信一編『近代日本における東アジア問題』吉川弘文館、2001年）、田中隆一の『「満洲国民」の創出と『在満朝鮮人』問題—『五族協和』と『内鮮一体』の相剋—』（東アジア近代史学会編『東アジア近代史—特集・植民地』支配と地域的課題』第6号、2003年）などがある。水野は植民地期朝鮮人国



籍問題に着目し、国籍に対する日本政府の対応と認識の検討を通じて日朝中の構造的関係の一側面を論じた。田中は教育・国籍・兵役に関する在満朝鮮人の政策に着目し、「満洲国」のイデオロギーの「五族協和」及び「内鮮一体」という日本の朝鮮統治のイデオロギーの相剋を指摘した。

先行研究を概観すると、これまでの研究は、移民史、移民政策、移民の教育などが主であり、ほとんどがマクロな視点である。それに対して個人の体験ないし経験に焦点を当てたミクロの次元の研究が少ない。本稿では文献資料を参考するほか、ライフヒストリー法を用いてミクロな視点で、ある移民一世の体験ないし経験について考察する。

## V 事例の紹介

本稿で事例として紹介するヤン・ヨンソク（楊龍錫）さんは、1926年3月4日（旧暦）に朝鮮半島の平安北道の楚山郡城西面内沿洞に生まれた。楊龍錫さんの事例を紹介することにあたり、匿名か仮名にするか楊龍錫さんに確認したところ、族譜のコピーをくださり、日本でも広く伝えてほしいので、実名使用の了承を得た。本事例を紹介することにあたり、三つの時代区分にした。つまり、まず朝鮮社会での生活、次に「満洲国」時代での生活、最後に中国社会での生活である。楊龍錫さんのライフヒストリーを紹介することにあたり、インタビューのデータだけではなく、楊龍錫さんが提供した族譜も参考した。

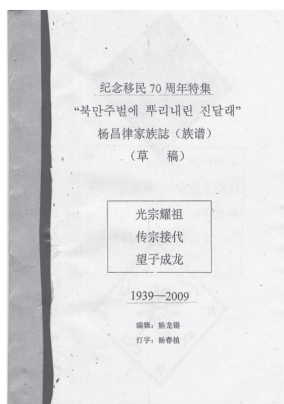


図1 楊龍錫さん家族の族譜の表紙  
楊龍錫さん提供

楊龍錫さんには、3回インタビューを行った。

1次調査は、2007年3月21日にハルビン市民族芸術館の事務室で行った。

2次調査は、2008年3月6日に楊龍錫さんの自宅で行った。

3次調査は、2010年6月22日にハルビンの北北快捷賓館にて行った。

## 1 朝鮮での生活と移民の理由

楊龍錫さんの家は、もともと広い土地と山を持ち、裕福な生活をしていた。1920年と1921年に家に大きな火災があった。特に1921年の火災では、父親が経営していた食糧倉庫を焼失した。この2回の火事で、家は貧困生活に陥ってしまった。

楊龍錫さんの父親は、『論語』『孟子』などの知識を持っている人で、生活が困難であっても子どもたちに教育をさせようとした。子ども全員を書堂<sup>14)</sup>に通わせた。自分は8歳(数え年)から書堂に通った。書堂の先生は「先生」ではなく「訓長」と呼んだ。書堂では『千字文』と『明心宝鑑』<sup>15)</sup>などを習った。書堂に通う学費は食糧で代替できた。父がチゲ<sup>16)</sup>で食糧を訓長に届けるのを見たことがあるという。

楊龍錫さんが住んでいた平安北道は日本から遠く、日本人の勢力が入るのが遅かったので、書堂は1936年まで存在したという。当時、楚山郡には普通学校は1ヶ所しかなかった。普通学校の学費は高かったため、貧しい家庭の子どもたちは行けなかった。家が貧しかったので、住んでいる村の内沿洞簡易学校に3年間通った。当時、簡易学校の学費は1ヶ月間約10～15錢ぐらいだった。簡易学校には2クラスあり、各クラスに約50人の生徒がいた。生徒は全員朝鮮人で、男の朝鮮人の先生2人がすべての科目を担当していた。学校では普通の授業以外に運動会や朗読大会を開いたりした。授業は月曜日から土曜日までであり、土曜日は午前中だけだった。授業は朝鮮語と日本語で行なわれたという。

楊龍錫さんは、1939年に家族とともに「集団移民」として「満洲」へ移住した。移民の理由について聞いた。

1938年から日本政府は故郷の楚山郡の辺りで水豊ダム<sup>17)</sup>の建設を始めた。ダムができれば村全体が水没してしまうので、どこかに移住しなければならなかった。しかし、私の家は小作農だったので、自力で朝鮮の他の地域に移ることはできなかった。その時、「鮮満拓殖株式会社」が楚山郡で移民を募集していた。朝鮮で住んでいた村は約40戸だったが、お金持ちと地主以外はほとんど移民団に参加した。裕福な家は朝鮮の他の地域へ移住した。

楊龍錫さんの家は大家族だった。当初、移民団に登録したのは16人だったが、姉の夫が急死したため、姉も「満洲」に行くことになり、80歳を超えたお婆ちゃんを含めて17人が「満洲」に渡った。「満洲」に渡った時は3月だったので、まだ寒かったという。

## 2「満洲国」時代での生活

最初、「満洲」に渡った時、まだ住宅ができていなかったので、倉庫で生活した。お婆ちゃんは倉庫で始まった「満洲」での生活に馴染めなかった。垂布力駅から汽笛を鳴らして通っていく汽車を見る度に、いつも怒っていた。「あの（「満洲」）鉄道がなければ、こんな遠い異国の地に来なかったのに・・・」。他の家族もお婆ちゃんと同じような気持ちだったという。

1939年の秋、錦河屯から2km離れた太陽村というところに楚山郡からきた集団移民団のために建てられた住宅ができた。「集団部落」に住む全員が平安北道の楚山郡からきたので、村の名前を楚山屯に変えたという。「集団部落」の生活について聞いてみた。

移住する前に「鮮満拓殖株式会社」の説明では、家も土地もすべて提供すると説明していたが、実際に着いてみたら家は建てている最中だった。そのため仕方がなく、先にできた錦河屯にある「鮮満拓殖株式会社」の倉庫で生活した。1939年の秋、錦河屯から約2km離れた太陽村に楚山郡からきた開拓団のために住宅が建てられた。私たち全員が平安北道の楚山郡の出身者なので、村の名前を楚山屯に変えた。1つの「集団部落」に50個の住宅が建てられた。住宅は中国人の苦力によって建てられた。広さ30㎡の住宅に2家族が住まなければならなかったのが狭かった。



図2 かつての「集団部落」に残る住宅

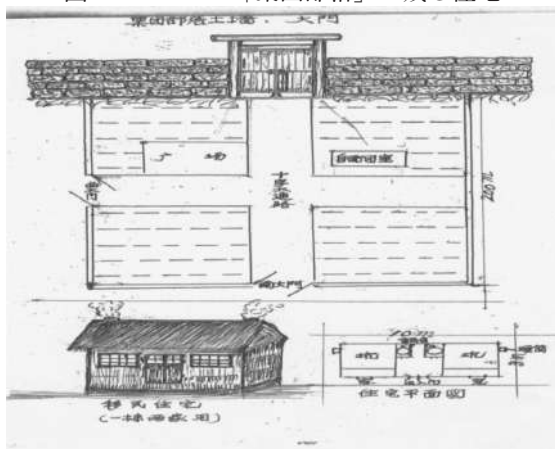


図3 「集団部落」の平面図

楊龍錫さん提供

楊龍錫さんがかつて暮らした「集団部落」では、自警団による警備態勢が敷かれていたが、住居条件や労働条件への不満から脱走者が多かったという。当日、楊龍錫さんは自身が作成した「集団部落」の平面図を筆者に見せながら語った。

「集団部落」は縦横 200 メートルの正方形で、高さ 2 メートルの土城で囲まれてその外には深さ 1 メートルの外濠が掘られ、さらにその外には鉄条網が張られていた。大門の所には自衛団室があり、電話も設置されていた。勤務する人には銃が配られ、定期的に「集団部落」を見回っていた。もし何かがあったら、すぐ垂布力警察所から警察官が駆けつけてくる。さらに実態が深刻になれば軍隊もやってくる。「集団部落」に住んでいる人は証明書を見せて出入りできたが、部外者の出入りは禁止されていた。朝鮮人移民は「集団部落」に集められて他の地域に自由に行き来できなかつた。しかし、住居条件や労働条件への不満から、「集団部落」から逃げる人もいた。

つまり「集団部落」は土城で囲まれてその外には外濠が掘られたり、さらにその外には鉄条網が張られたりして、内部と外部との接触を禁じていた。

帝国日本の植民地統治時代、「満洲」においても、朝鮮人は朝鮮語の使用が禁止され、名前を日本式に変えられたほか、神社の参拝も強要された。特に

学校ではその統制が厳しかった。楊龍錫さんは次のように語った。

小学校は亜布力の新興国民優級学校に通った。朝鮮の簡易学校に3年間通ったので、亜布力では3年生から編入して6年生まで通った。5年生までは朝鮮総督府が編集した教材を使用して朝鮮語を習った。1941年以降は朝鮮語の使用が一切禁止され、日本語のみ使用することになった。小学校を卒業した後、ハルビン市にある第二師道学校に進学した。校長先生の名前は中山と言ひ、鹿兒島出身だった。

師道学校でも日本語を話すのが義務付けられていた。日本語を話さなければ罰せられた。寮に泊まり、毎朝ハルビン神社まで走らされ、神社参拝をしなければならなかった。当時、日本人は朝鮮人を「半島人」だと呼んでいた。もし、日本の支配がもっと長かったならば、朝鮮人は日本人に完全に同化してしまったかもしれなかった。私の名前は清本龍錫と変えられた。最後まで抵抗して名前を変えなかった人もいたが、ほとんどの人は仕方がなく名前を変えた。日本式の名前に変えなければ、日常生活で米の配給や汽車の切符購入時に制限があった。米や砂糖などの配給を受ける際、身分証明書の提示を求められた。氏を自分で選択することはできた。私の家は「清州楊氏」なのでそこから「清」の字を取り、本貫<sup>18)</sup>を忘れないように「本」の字を入れて「清本」にした。名前まで変えられたことを簡単に赦すことはできない。

楊龍錫さんの語りから分かるように、小学校に通った時から朝鮮語の使用は禁止され、中学校に通った際には毎日のようにハルビン神社まで走って参拝させられた。民族の名前を日本式の名前に変えられた際、楊龍錫さん一家は本貫を忘れないようにし、帝国日本の植民地統治に抵抗を示した。アイデンティティの表象である名前を変えられるのは苦痛であるに違いない。楊龍錫さんがハルビン第二師道学校に通っていた1945年に赤紙をもらった。その話を聞いてみた。

1945年7月20日から夏休みに入ったのに、校長先生は生徒たちに毎日軍事訓練をさせて家には帰らせなかった。7月31日になって校長先生は突然「みんな家に帰れ」と一言だけいって、生徒たちを解散させて家に帰らせた。亜布力に着いたのは7月31日の夜だった。

8月12日の日に学校から「召集令状あり、すぐ帰ってこい」という電報がきた。家族は学校に戻ることに強く反対した。当時、私は毎日天皇崇拝

をして大和魂を持ち、精神状態は日本人になっていた。電報をもらって行かなかったら大変なことになると思い、家族が反対しても学校に戻ろうとした。しかし、駅に行っても切符を売る人はいなくなり、列車は止まらずに通過した。列車に乗っているのは、ほとんど全員が日本人の避難民だった。8月13日、14日も出かけてみたが、同じ状況だった。結局、学校に戻れないまま8月15日になって日本の敗戦を迎えた。もし、戦場に行ったら私も死んだかもしれない。当時、戦争にはみんな死ぬ覚悟で行った。

戦争は人の意識を変えてしまう。楊龍錫さんが召集令状をもらった後、家族が反対したにも関わらず、駅に連日に出て学校に戻ろうとするエピソードはリアリティーがあった。楊龍錫さんは、敗戦時の混乱状況も体験した。1945年8月9日、ソ連軍が綏芬河と東寧など国境沿いの川を渡って、「満洲」にやってきた。ソ連軍のタンクが500メートル間隔で連日ずっと入ってきた。どうしてあんなに多いか分からないが、1ヶ月間ぐらいタンクが入り続けた。1945年8月10日頃、ソ連軍による空襲も始まった。亜布力には大きな木材工場があったが、ソ連軍の爆弾の攻撃を受けて、火事になってしまい、混乱状態だったという。

かつて楊龍錫さんが通っていた師道学校の跡地は、現在ハルビン市第一高校の校舎として使われている。2010年6月22日、筆者は楊龍錫さんと師道学校の跡地を訪ねた。警備員の了承を得て学校のグラウンドまで入ることができた。



図4 師道学校の旧地を訪れる楊龍錫さん  
筆者撮影

グラウンドに入ったとたん、楊龍錫さんは突然持っていた杖を横にして、「銃剣術は分かるか？ここで銃剣術をやった」といった。「その場所で語られるべき戦争の記憶がある」<sup>19)</sup>といわれるように、直接現場に行くことによって戦争の記憶が蘇った。戦時中に軍事訓練を受けた戦争の記憶は、いまだに楊龍錫さんの体に染みついているようだ。

### 3 戦後、中国社会での生活

楊龍錫さんは1945年にキム・ユシユン（金有順）さんと結婚した。金有順さんも1939年に「集団移民」で「満洲」に渡ったという。「満洲」で最初に入った場所は、間島の白頭山近くの大甸子村だった。

白頭山一帯は金日成が率いる抗日連軍の根拠地であるため、抗日連軍による活発な抗日武装闘争が起きていた。金有順さんが居住していた大甸子には、抗日連軍の兵士が頻繁にきて、開拓団員に入隊を誘ったり、開拓団の家庭に食べ物をもらいにきたりしていた。開拓団員のなかに抗日連軍に参加する者もいた。朝鮮人の開拓移民を白頭山地域に移住させたのは、抗日連軍の活動を遮断する目的だったが、逆効果が出てしまったことに、開拓団を管理する日本人は大変慌てていたという。1941年の秋、金有順さんが所属していた開拓団は、再度集団で垂布力に移住した。垂布力で楊龍錫さんの家族と出会って、親同士の話で結婚が決まった。

戦後間もなく、妹は朝鮮の咸鏡道の人と結婚して北朝鮮に行った。朝鮮戦争が起きたとき、妹はアメリカ軍の砲撃を受けて死んだ。今でも妹を思い出したら、胸が痛くなり泣きたくなくなるという。いつか北朝鮮に行って、妹の墓参りをしたいが、生きていうちはできないかもしれないと述べた。

楊龍錫さんは、民族教育に参加して、41年間で三つの民族学校の設立に携わった。初めて携わったのは、垂布力の楚山屯に自分一人で設立した学校だった。自分一人で校舎を建てて、椅子と机も自分一人で作ったという。正式な学校の名前もなかったが、当初は楚山小学校と名づけた。次に携わったのは新興朝鮮族小学校だった。1948年に何人かの教育関係者が力を合わせて垂布力の各村にある小学校を集めて設立したという。その後、新興小学校から尚志朝鮮族小学校に移り、それからハルビン市朝鮮族第一中学校に移った。三番目に携わったのは、設立の中心メンバーとして参加したハルビン市第二朝鮮族中学校だった。教育委員会の指令でハルビン市第二朝鮮族中学校の設立に携わり、初代の校長になった。教育の仕事が大好きで、教育現場では、「厳字当頭、愛字浸透」（何よりも厳しさが大切だが、愛情を持って生徒に接しなければならない）を一貫しておこなったという。楚山小学校を設立したこと

について、楊龍錫さんは語った。

楚山屯には約 100 戸の朝鮮族が住んでいて、子どもたちは約 70 人いた。子どもたちはみんな戦前の日本式の学校に通ったので、朝鮮語をほとんど知らず、驚くことにはバケツ、箒などの日常用語も分からなかった。教室の前に黒板をかけて、朝鮮語で「흑판」(朝鮮語で黒板の意味)といっても分からなくて、日本語で「こくばん」と言わなければ、分からなかった。自分の民族の言葉が分からないことをこのままにはいけないと思い、学校では主に朝鮮語を教えた。

朝鮮語を教えることが民族教育に参加したきっかけだったという。楊龍錫さんは朝鮮族の民族学校がどんどん閉校していることを心配していた。最近多くの朝鮮族の若者が出稼ぎで韓国に行くため、結婚する人も少なくなった。それで、子どもが生まれないので、生徒が激減してきたという。かつて黒龍江省には民族学校が約 280 校あったが、現在は 20 数校に減ったという。

インタビューの最中、朝鮮半島で流行した歌の話題で話が弾んだ。楊龍錫さんは、突然何かを思い出したようで、『故郷の春』<sup>20)</sup>の歌をうたい始めた。

わたしの故郷は 花の里  
ももの木 あんずの花 姫つつじ  
色もとりどり 花ごてん  
みんなで遊んだ日が なつかしい

花の村 鳥の村 わが故郷  
青い野原に 南風吹けば  
川辺の柳も おどりだす  
みんなで遊んだ日が なつかしい

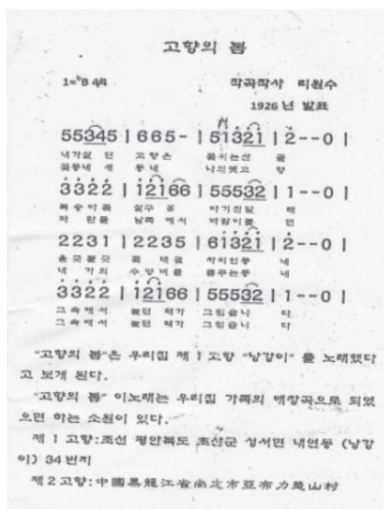


図5 族譜に取り入れた『故郷の春』  
楊龍錫さん提供



楊龍錫さんは、目を半分閉じ、故郷を思い出しながらうたっていたようで、気持ちがあっさり入った歌だった。朝鮮半島で住んでいたところが鴨緑江と近かったので、よく釣りをしに行ったという。自分の故郷は歌に描いているように、景色もきれいだし、住みやすいところだった。小さい時、朝鮮の故郷で遊んだ場所が記憶に鮮明に残っているという。この歌はまさに自分の故郷を表している。この歌に込められた意味は、現代の若者には到底理解できないだろうといった。故郷に行ってみたくと何度も思ったが、手続きが難しく行って行ったことはない。恐らく自分が生きていうちには帰れないかもしれない。楊龍錫さんの自宅には、音楽に関するカセットテープ、CDなどがたくさん置いてあった。故郷を偲ぶ音楽をよく聞き、『故郷の春』を族譜にも取り入れた。

## Ⅵ 考察及び今後の課題

本稿では朝鮮人「満洲」移民という「歴史的事象」に対してライフヒストリー（生活史）法を用いて、「事実の探求」と「意味の探求」ができた<sup>21)</sup>。本稿では連続的な視点で楊龍錫さんの個人史を通して、移民一世たちが生きてきた社会史を照射した。朝鮮人「満洲」移民一世を対象とする本格的なライフヒストリー調査は、2006年9月から始まった。移民一世はほとんど90歳近くになっている。竹中憲一がいうように、「人間という記憶媒体から歴史を再構成する作業は、まさに時間との競争である」[竹中、2003:7]。あと数年が経つと、移民一世はほとんどこの世から去っていくだろうと考えられ、インタビュー調査を急がなければならないと痛感している。

3回のインタビューを通して、楊龍錫さんから長年民族教育に身を捧げてきた教育者の情熱を感じ取った。楊龍錫さんは日常生活でほとんど朝鮮語を話し、エスニック・アイデンティティをしっかりと持っていると感じた。帝国日本時代に民族言語が失われかけた危機を経験したからこそ、民族言語の重要さをより深く認識しているといえよう。

社会学者の水野節夫は、ライフヒストリー法を用いることにより、「調査者が思いもよらなかったような意外な事実発見へと導かれる可能性があることである。われわれ抱かれがちなステレオタイプ化された人間像とか勝手な思い込みを打ち砕いていく可能性を生活史調査は秘めており、また、そうした可能性が現実のものになる可能性が期待されている」[水野、1986:153-154]と述べている。本研究では、ライフヒストリー法によるステレオタイプ化された人間像とか勝手な思い込みを打ち砕いていくことにも注目した。楊龍錫さんは、インタビューを受けた際、妹を朝鮮戦争で亡くしたことを語った時

には悲しみの感情を露わにした。その時以外は、楊龍錫さんはインタビューに応じて、ほとんど淡々と語っていた。筆者が奥さんの金有順さんにインタビューした時、楊龍錫さんは奥さんに向かって、「私と結婚して苦労した話はないで、幸せだったと言ってね」と笑いながら言い、ユーモアのある一面もうかがわせた。

政治学者の石田雄によれば、「元来記憶という行為は、現在の立場から過去を再構成し、そのことによって未来にむけた行為を意味づける作用を持っているといえよう。その意味で記憶は過去と未来の間にある行動主体が、現在において行なう——意識しなくてもなされる——選択をともなう行為である」[石田, 2000:12]。楊龍錫さんの故郷についての記憶は、1939年に朝鮮半島から「満洲」に渡った時で止まっているようだ。朝鮮の故郷に帰りたくても帰れなかったのも、ノスタルジーを抱きながら生きていたようだ。故郷への思いの強さは、『故郷の春』という歌を族譜に取り入れたことから読み取れる。また、楊龍錫さんの戦争の記憶のなかには、学生時代に軍事訓練を受けたり、赤紙をもらったりした体験が大きなウェイトを占めている。

本稿で取り上げた楊龍錫さんの事例が示すように、移民一世は、「朝鮮社会」、「『満洲国』時代」、「中国社会」という三つの時代を経験している。楊龍錫さんの話に耳を傾けることで、過去半世紀前の激動の歴史を知り、「あり得たかもしれない歴史を現在において想像して」[本橋, 2005: 222]、21世紀に生きていく私たちは何か強いメッセージを捉まえるに違いない。楊龍錫さんは、帝国日本の国策によって朝鮮半島から「満洲」に移住したことを、子孫たちには直接伝えていない。今まで調査してきた他の多くの事例からも同じような証言を得た。今後の課題は三つあると考えている。一つは、「集団部落」についての研究を進める。楊龍錫さんと奥さんの金有順さんとも「集団部落」の生活体験者である。移民一世がかつて「集団部落」で住んだ住宅(物質としての場)はまだ残っている。ノラがいうように、「われわれは歴史的現実の彼方にシンボリックな現実を発見し、それを支えてきた記憶を蘇らせねばならなかった」[ノラ, 2002: 18]。このような物質としての場が、移民一世の記憶の噴出にどんな影響を与えているかは、今後の課題としたい。二つは、移民一世がいかに記憶を移民二世、三世以降に伝えていくか、ということである。三つは、移民一世の記憶の語りは、日本社会への語りかけだけではなく、中国社会への語りかけ、そして韓国社会<sup>22)</sup>への語りかけという複合的な視野におさめて考察されるべきものであるということである。ただし、本稿は日本社会のみを対象としており、中国社会及び韓国社会への考察は、今後の課題としたい。

## 付記

本稿は科学研究費（23K11574）の助成を受けた研究成果の一部である。

## 注

- 1) 「満洲」への朝鮮人の移住が始まった時期についてはさまざまな説があるが、本研究の課題ではないので立ち入らない。朝鮮人の「満洲」への移住の時期をめぐって、これまで土着民族説、元末明初説、明末清初説、19世紀中頃説などが主張されてきた。朝鮮人の「満洲」への移住の起源説に関しては、鶴嶋雪嶺『中国朝鮮族の研究』[関西大学出版部、1997]が詳しい。
- 2) 1910年に、大韓帝国は、日本に併合されたが、朝鮮の民衆は、日本による併合に不満を抱き、統治を支持しなかった。そうしたなかで、死んだ前国王(高宗)の葬儀が行われる2日前の1919年3月1日に、ソウル(旧京城)で「独立万歳」を叫ぶ大規模なデモが行われた。この運動のはじめの頃は、平和的に行われていたが、朝鮮総督府が武力で弾圧したため、運動は暴動化して、多くの死傷者を出した。
- 3) 「土地調査事業」は、朝鮮の植民地化初期に行われた土地の所有権、価格、地形、地貌等の調査・測量事業である。(中略) この事業の結果、総督府財政の基礎が確立し国有地が創出される一方、事実上の農民的土地所有を否定されたり、土地を収奪された農民が小作人に転落して地主的土地所有が再編・強化され、また土地商品化が進められるなかで国有地払下げの恩恵も受けるなど、日本人地主の進出が容易となった[伊藤他、2000:325]。
- 4) 「産米増殖計画」は、1918年の米騒動で糾弾された日本の食糧問題の解決のために、朝鮮の米穀の増収を図って、朝鮮総督府が、1920年から始めた土地・農業改良事業である。1930年の昭和恐慌以降、この事業は停滞し、1934年に事業は中止された。その結果、産米増収は果たされたが、朝鮮農業の対日移出用の米穀モノカルチャー化が進み、大地主の土地集積が強まった。
- 5) 1931年末に51万人であった在朝日本人は、42年末に75万人であった[高崎2002:159]。
- 6) 加藤完治は、満蒙開拓青少年義勇軍の設立にかかわり、日本人の満蒙開拓移民を推進した。
- 7) 中野卓「歴史的現実の再構成——個人史と社会史——」中野卓・桜井厚編『ライフストーリーの社会学』弘文堂、1995:191-192。
- 8) 桜井厚『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房2002:58-59。
- 9) 谷富夫編『新版 ライフストーリーを学ぶ人のために』世界思想社、2008:iv-v。
- 10) 私たちの生には、それぞれが互いに対応しているのだが異なる三つの生がある。生活としての生 life as lived、経験としての生 life as experienced、そして語りとしての生 life as told の三つである[桜井、2002:31]。
- 11) 中国では「文化大革命」など幾度も繰り返されてきた政治闘争や批判大会のなかで、個人的な情報を公開することに警戒感があり、聞き取りを行うのは難しいと考えられたが、中国社会も

今や国際化社会になり、自由に記憶を語り合う環境が徐々に整えられ、移民体験者の抑圧された記憶が解放された。

- 12) 金贊汀の『世界』で発表したルポは、『日の丸と赤い星——中国大陆の朝鮮族を訪ねて』[情報センター出版局, 1998年]に収録された。
- 13) 学際的な研究領域である移民研究においては、歴史学、地理学、社会学、文化人類学、政治学、法学、文学、宗教学、言語学、心理学、教育学、博物館学、図書館学、エスニック研究、メディア研究などの人文・社会科学の他に、最近では看護学、健康福祉科学や音響学、映像技術といった医療・福祉、工学などの自然科学分野からのアプローチも珍しくなく、まさに人間の移動という局面から科学する総合的な領域になりつつある[森本豊富, 2011:279]。
- 14) 朝鮮で初学者のための入門的な教育を行う私塾をいう。
- 15) 高麗・李朝時代に広く用いられた箴言集。
- 16) 荷物をのせ、人が背負って運ぶ朝鮮の運搬道具。
- 17) 水豊ダムは中国と朝鮮との国境を流れる鴨緑江の上流、平安北道北部に建設されたダムである。日本の植民地時代の末期に約8年間をかけて1944年に完工した。
- 18) 氏族発祥の地名を指し、姓氏と組み合わせて表記される。
- 19) この表現は、姜尚中・森達也の『戦争の世紀を超えて—その場所で語られるべき戦争の記憶がある』[講談社, 2004]から借りた表現である。フィールドワークを行う際にインフォーマントから許可を得て、相手の健康状況が大丈夫であれば、なるべくインフォーマントと一緒に戦争体験をした現場に行くようにしている。
- 20) 『故郷の春』は1926年、『オリニ』に掲載された童謡だった。作者は李元壽で、1925年秋、馬山公立普通学校の卒業班の生徒だった15歳の時に作ったものだった。今もこの歌は朝鮮の郷愁と童心を代表する歌として、老若男女を問わず広くうたわれている[朴燦鎬, 1987:105]。
- 21) 「事実の探求」と「意味の探求」は有末(2006)から借りた言葉である。有末によれば、「歴史的事実の記述を中心とした政治史、外交史、経済史、社会史などに比べると、生活史には人間主体の『生きる意味の探究』という意味の側面が重要視されている。しかし、人間の内面や『生きる意味』自体に主題を置いた小説、文学や哲学に比較すると、生活史は、個々人の『生きた経験』に根差しているという意味で、決してフィクションではなくて『事実』を根拠にしている。したがって生活史調査の場面においても、『事実の探究』と『意味の探究』が重なり合いながら進行していくと考えられる」という[有末, 2006:54]。
- 22) 朝鮮半島全体を視野にいれてあるが、現段階では北朝鮮民主主義共和国での学術的な発表は難しいことに鑑み、この表現を選んだ。

#### 参考文献

有末賢, 2006, 「ライフヒストリーにおけるオーラル・ヒストリー」『日本オーラル・ヒストリー研究』創刊号50-64.

- 蘭信三, 1990, 「『満州』農業移民の生活史」 筒井清忠編『「近代日本」の歴史社会学——心性と構造』木鐸社141-168.
- 石田雄, 2000, 『記憶と忘却の政治学——同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店.
- 伊藤亜人・大村益夫・梶村秀樹・武田幸男・高崎宗司監修, 2000, 『新訂増補 朝鮮を知る事典』平凡社.
- 内海愛子, 1991, 『朝鮮人「皇軍」兵士たちの戦争——証言昭和史の断面』岩波ブックレット.
- 韓景旭, 2001, 『韓国・朝鮮系中国人=朝鮮族』中国書店.
- 金賛汀, 1987, 「『満州』・そこに打ち捨てられし者」『世界』(第498号、第499号、第501号)、岩波書店、314-324、316-328、330-338.
- 金永哲, 2012, 『「満洲国」期における朝鮮人満洲移民政策』昭和堂.
- 小林龍夫・島田俊彦・稲葉正夫編集・解説, 1965, 『続・満洲事変』(現代史資料11), みすず書房.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- 孫春日, 2003, 『「満洲国」時期朝鮮人開拓移民研究』延辺大学出版社.
- 孫春日, 2009, 『中国朝鮮族移民史』中華書局.
- 高崎宗司, 1996, 『中国朝鮮族——歴史・生活・文化・民族教育』明石書店.
- 田中隆一, 2003, 「『満洲国民』の創出と『在満朝鮮人』問題—『五族協和』と『内鮮一体』の相剋—」東アジア近代史学会編『東アジア近代史—特集・『植民地』支配と地域的課題』第6号、28-43.
- 田中隆一, 2006, 「日本の朝鮮植民地支配と『在満朝鮮人』問題——「満洲国」時期を中心に」日韓文化交流基金編『訪韓学術研究者論文集第6巻』日韓文化交流基金39-75.
- 竹中憲一, 2003, 『大連アカシアの学窓——証言植民地教育に抗して』明石書店.
- 中国朝鮮族青年学会編/館野哲・武村みやこ・中西晴代・蜂須賀光彦訳, 1998, 『聞き書き中国朝鮮族生活誌』社会評論社.
- 鶴嶋雪嶺, 1997, 『中国朝鮮族の研究』関西大学出版部.
- 谷富夫, 1996, 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.
- 満鉄調査部, 1938, 『満洲農業移民概説』(産業調査資料第52編) 南満洲鉄道株式会社.
- 民生部総務司調査科編, 1933, 『在満朝鮮人情』(調査資料第3号).
- 中野卓, 1995, 「歴史的現実の再構成——個人史と社会史——」中野卓・桜井厚編『ライフストーリーの社会学』弘文堂191-218.
- 朴燦鎬, 1987, 『韓国歌謡史(1895-1945)』晶文社.
- ピエール・ノラ編/谷川稔監訳, 2002, 『記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史』(第1巻) 岩波書店.
- 玄圭煥, 1967, 『韓国流移民史(上)』語文閣.
- 洪鐘佑, 1987, 『「満州」(中国東北地方)における朝鮮人農業移民の史的研究——1910~1930年を中心として——』京都大学農学研究科博士論文.
- 本橋哲也, 2005, 『ポストコロニアリズム』岩波新書.

- 松村高夫, 1972, 「満州国成立以降における移民・労働政策の形成と展開」満州史研究会編『日本帝国主義下の満州』御茶の水書房213-314.
- 松本武祝, 1998, 「朝鮮人の満洲『国策』農業移民—政策と実態—」(京都大学総合人間学部編『「満蒙開拓団」の総合的研究—母村と現地』1995～1997年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書105-119.
- 水野節夫, 1986, 「生活史研究とその多様な展開」青井和夫監修・宮島喬編『社会学の歴史的展開』サイエンス社147-208.
- 水野直樹, 2001, 「国籍をめぐる東アジア関係——植民地期朝鮮人国籍問題の位相——」古屋哲夫・山室信一編『近代日本における東アジア問題』吉川弘文館.
- 森本豊富, 2011, 「移民を研究する——移民調査研究の今とこれから——」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』御茶の水書房278-289.
- 山本有造, 2004, 「満洲国——ある歴史の終わり、そして新たな始まり——」藤原書店編集部編『満洲とは何だったのか』藤原書店67-77.
- 依田憲家, 1976, 「満州における朝鮮人移民」満州移民史研究会編『日本帝国主義下の満州移民』龍溪書舎
- 李勲求, 1932, 『満洲の朝鮮人』崇実専門学校経済研究室.

## Abstract

This paper examines and shows what a typical Korean immigrant in Manchuria went through after settling down there. Some immigrants of the first generation still live in the three provinces of the North-East part of China once called “Manchuria.” They moved there from their native land when the country was under the reign of the Japanese Empire. According to Yoda (1976), “The collapse of the Korean feudal system displaced some people as immigrants to Manchuria, which later was accelerated by the colonization policy of Imperial Japan (p.602). The fact that the immigrants are still alive tells us that they have not gone down in history as something past and forgotten, but their experiences are there to be handed down from generation to generation. The approach adopted in this study was to make personal contact with a certain immigrant of the first generation, listening to what he had to say about his life (Araragi,1990,p.145), while contrasting his story with an objective version of historical events.

Key words : Manchuria, Korean immigrants, life history